

明治大学人文科学研究所紀要 第54冊 (2004年3月31日) 211—227

茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究 ——永山村絵図を中心に——

門 前 博 之

— *Abstract* —

An Examination of the Documents of the Suda Family in Former
Ushibori Village, Namekata County in Ibaraki Prefecture:
With Emphasis on the Pictorial Map of Nagayama Village

KADOMAE Hiroyuki

The author attempts to confirm the locations of the residences entered in the Kanei land survey records of both Ushibori and Nagayama Villages, and to identify the settlements of these villages. In order to start the research, he needed the Pictorial Map of Nagayama Village that provided essential information concerning the subject under consideration. Since it was neither well-drawn nor well-preserved, however, he thought it impossible to accomplish the attempt at first sight. But, after the close examination of the pictorial map, it turned out to be very useful to implement the purpose of the present research. The locations of ninety parcels of the residences were clearly identified in the Pictorial Map of Nagayama Village though the number of the residences registered in the Kanei land survey record of the Nagayama Village was ninety-eight. However, the author find it necessary to prove the historical change of the system of the village at issue on the basis of the Pictorial Map of Nagayama Village as research material.

《個人研究》

茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究

——永山村絵図を中心に——

門 前 博 之

はじめに

本研究に着手して以来、牛堀・永山両村の寛永検地帳の屋敷地の村内における所在位置等を検討し、寛永期における集落のあり方を復元したいと考えてきた。一般的には屋敷地が記載された寛永期の村絵図などの存在は考えられないから、それには寛永以降の村絵図類や聞き取り調査が手掛かりとなる。

須田本家文書目録^①中の牛堀・永山両村に関する絵図には、牛堀村については「(牛堀村耕地・屋敷地見取絵図下書)」(欠年)、永山村については「(永山・牛堀両村谷田側一筆限田地番入絵図)」(欠年)・「(永山村絵図)」(欠年)とそれぞれ表題が付された絵図がある。牛堀村の耕地・屋敷地見取絵図下書は、縦282 mm 横400 mm ほどの和紙11枚に描かれ、それを袋綴じにし、冊子形態にまとめられている絵図である。この絵図には区画ごとに天保13年検地帳の地目・等級・面積・地番や作成時の所持者名が記入され、屋敷地ごとに屋敷の姿が描かれているほか、高札場もあり、河岸場には舟も描かれている。この絵図と安政4年の人別帳(国文学研究資料館史料館所蔵)記載の家ごとの商売を照合すると近世後期における牛堀の町並みをリアルに復元することは可能だが、天保検地帳と寛永検地帳の屋敷地名請人39名を照合しても名前が合致するのは5名ほどであり、牛堀村の寛永検地帳の屋敷地の所在を確認しその集落を復元することは不可能であった。永山村の一筆限田地番入絵図は、須田新宅文書(国文学研究資料館史料館所蔵)中の巻物に仕立てられ、表紙裏に「安政四年丁巳閏五月本家より内写す」と記された「永山村谷新田全図」の原図ではないかと思われる。須田本家文書目録の同図表題は新宅文書の原題のように改められなければならないが、この図は後者の原題が示すように永山村谷新田の全図であり、これには屋敷地の記載は全くない。魚鱗のように描かれた耕地には地番が付されているが、これも天保検地帳のものであろう。

永山村の「(永山村絵図)」(欠年)は須田本家文書目録を紹介した際、既に触れたことのある絵図である。この絵図の裏隅には須田本家文書の伝来に関わることが記されていたからである^②。その文言を再録すると「須田茂重郎様御たんせい遊ハシ候絵図、水戸国らんの時、打込置候所、ばら々々に

相成候に付、妻ちうたんせいいたしうら打をいたし、子孫へ伝へ可^(カ)厚きおほしめし有所ゆへ大切ニ致可事、佐原 伊能四郎平妻 くミ、御両親様の為 且御先祖様への為国らんニ付我等夫婦の物たんせい一方ならず、殊ニ大切の書物類首肯^(カ)候事ハまつたへ私のいつしんニてかくまい、親類立合の上子孫へ相ゆつり申所実正也」とある。この文言から、佐原の伊能四郎平と妻くミ一須田本家10代茂重郎娘、11代内蔵八妹⁽²⁾—が子孫へ譲るために匿ったのはこの絵図1点だけではないことが窺える。諸生派に属した須田本家は慶応4年閏4月闕所となったが、この絵図は水戸藩末の激動期に、粗雑に扱われたのであろう、ばらばらになったので、茂重郎の妻ちうが裏打ち等を行ったものであるという。実際にこの絵図を見てもいかにも素人が行ったような裏打ちであり、張り合わせも正確に整合していない部分も多い。

改めてこの絵図の原寸を計ってみると、この絵図は最大縦195 cm・最大横277 cmの大型の村絵図であるが⁽³⁾、そのためこの絵図を開いて検討する十分な場所が得られなかったこと、そしてこの絵図自体未完成な絵図であることが、一見して理解されたこと、また、残存する絵図類から推して近世初期の永山村の様子を知ることのできる絵図とは思えなかったこと、等の理由で検討を怠ってきたのであるが、本年の現地調査に先立って少々検討してみると、この絵図によって永山村の寛永検地帳の屋敷地のあり方や古い永山村の様子を検討することが可能であることが判明した。

以下、この絵図の概要について説明し、絵図に寛永検地帳の屋敷地がどのように現れるか検討を加えよう。

1

はじめに記したごとくこれから検討する村絵図は最大縦195 cm・最大横277 cmの大型の村絵図で、それ自体未完成な絵図である。記入するためと思われる地目・等級・面積・所持者名などを記した何枚もの付箋が貼られた紙がまだ絵図の一部に貼られており（後掲絵図の東側水田部分）、また、修正のためであろうか、書き直された張り紙のある部分もある（後掲絵図山王日吉神社西側）。絵図には区画された畑地・屋敷地が描かれ、その間数・等級・面積・所持者名が記されているが、畑地全ての区画にそのような記入があるわけではなく、それら全ての記載のない区画もあり、また、この村の台地の東西に展開する水田についてもほとんど描かれておらず、明治18年測量参謀本部陸軍部測量局迅速図「潮来村」（大日本測量資料調査部複製図）に見られる村内東側谷田地域のかんや沼も描かれていない。

以上のごとくこの村絵図は未完成な村絵図であり、また、この村絵図には表題も記されておらず、作成意図も明確ではない。作成されたのは先のこの絵図裏書きに「須田茂重郎様御たんせい」とあるので、茂重郎が庄屋であった期間とすれば、天保7（1836）年2月より安政元（1854）年9月の間ということになる⁽⁴⁾。この絵図によって永山村の寛永検地帳上の屋敷地のあり方の検討が可能だと述べたが、寛永検地帳の1筆目「はら 下畠壱反壱畝拾四歩 庄作」を絵図に探すと、後掲絵図の188長泉院の前の道を隔てたその西側であり、さらにその西へ5筆目までが連なっているが、面積は同

じでも名請人名は異なっている。屋敷地の記載も同じであるが、絵図の耕地・屋敷地の所有者名はこの絵図が作成された当時の所有者名であろう。この絵図には寛永検地帳を年貢収取の基礎とする時期の永山村の様子が示されているが、後述のごとく安永7年8月建立の金比羅社が描かれているから、寛永以降近世後期にいたる村の様子の変化がこの絵図には凝縮されている筈である。天保13年11月この村に水戸藩の天保検地が実施されているが、須田茂重郎はそれに先立って旧来の村の様子を把握しておく目的でこの絵図を作成したのではないかと考えられるのである。

この絵図には畑地についてはその間数・面積・所有者名などが記されているのであるが、完全には記されていないので、これについては省き、屋敷地を含むその他の記入事項の記入位置を示した附表とともにこの絵図のトレース図を示すと次の折込み図のごとくである⁶⁾。この絵図には方位はなく、また、寺社の向きや一区画内の文字記入の向きが同じではないので、どの位置から見ればよいのか判然としないが、トレース図は北側を左に置き、文字位置もそれに合わせて記入してある。

この絵図を見ると、寺社等には堂舎とともに樹木も描かれている。表題を「永山村絵図」とした所以であるが、以下このトレース図によって永山村について見よう。

集落について詳しくは後にみるが、屋敷地は台地上に散在しており、寛永期には既に永山村の集落の原形は形成されていたように考えられる。村内西霞ヶ浦側の崖下に走る旧麻生玉造小川通＝現国道355号に沿って並ぶ屋敷地はほとんどなく、附表の34・35・286の屋敷地のほか115の普門院（延方村）持の屋敷地しかないが、34は新屋敷である。永山村は漁村としての性格をも有しているが、専業漁師はおらず漁場からの利益は惣村共有となっていたことが集落のあり方からも窺われよう。

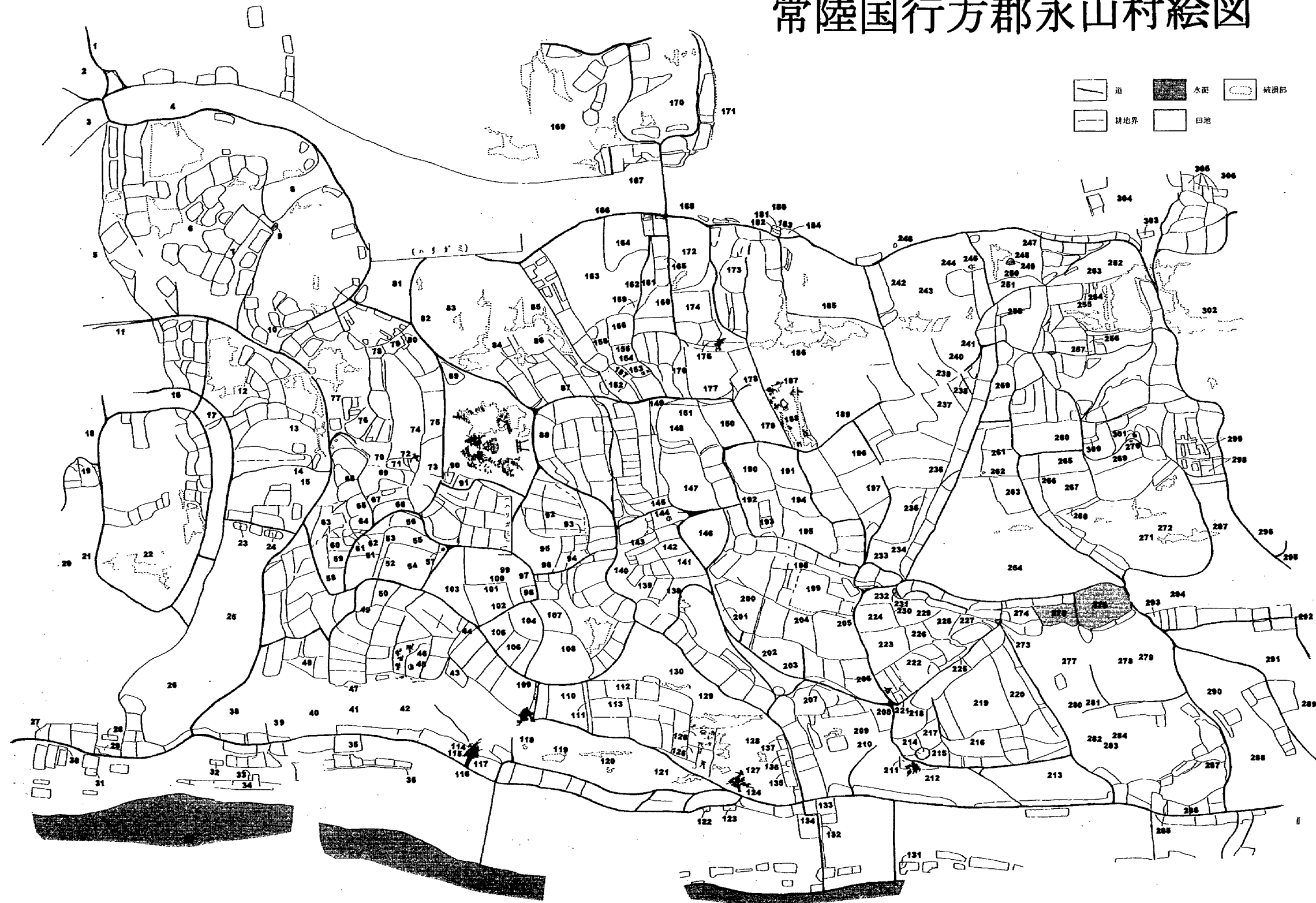
村内東の谷田を隔てて戦国期に長山氏の拠った城山（附表の169・170、以下同じ）があり、その南側にねこや（171）の文字があるが、根小屋集落はない。永山城は大永2年島崎氏によって攻め落とされたが、島崎氏はその後も玉造氏・麻生氏とも戦っているから、永山城は引き続き利用されたことが考えられ、永山城と根小屋集落が消滅したのは天正19年佐竹氏の謀計によって島崎氏が滅ぼされた時なのではないかと推測される⁶⁾。ちなみに慶長元年東側隣村堀之内村に建てられた堀之内城の麓部には根小屋集落は存続している。

寺社は村中央よりやや北に鎮守山王日吉権現（絵図には名称記載なし）が描かれているほか地藏院（45）・金比羅社（126）・長泉院（188）とその他小堂・小祠が描かれているが、堂舎が描かれていないのに感応院山（74）の名称もある。感応院は感応院山（74）の付近にあった寺院と考えられるが、堂舎が描かれていないのは、この寺が水戸藩の元禄の寺院整理の際破却されたためである⁷⁾。正徳6年「破却寺埒明次第」⁸⁾によるとそのような寺院が永山村には3ヶ寺あって、地藏院（真言宗、本寺延方村普門院）が元禄5年、龍藏院（天台宗、本寺堀之内村仁本松寺）が元禄13年、感応院（龍藏院に同じ）が元禄15年にそれぞれ破却されている。破却された地藏院は絵図に描かれた地藏院（45）とは異なるのであろう。既述のごとく普門院持の屋敷地（115）があり、「破却寺埒明次第」には地藏院の屋敷・除畑ほかが本寺へ下されたとあるから、普門院持の屋敷地（115）に破却された地藏院があったのではないと思われる。

長泉院（禅宗、上戸村長国寺末堅広山長泉院）は絵図に描かれた寺の位置とは別の場所に長泉院古

茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究——永山村絵図を中心に——

常陸国行方郡永山村絵図



茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究——永山村絵図を中心に——

永山村絵図附表

番 号 (文字位置)	記 入 文 字		
1	かのふや坂	35	屋敷五畝拾歩「屋敷七畝廿歩」惣衛門
2	富田地内	36	此通り一間通畠田二成
3	富田地	37	霞ヶ浦
4	いなこ田	38	御林
5	富田境	39	源兵衛「山」
6	孫衛門山「下山式反六畝四歩」	40	善左衛門山
7	きんしゆ 惣衛門「田面」	41	定七山
8	るや ^(カ) 「田面」	42	地「蔵院山」
9	池	43	地藏境
10	下山三畝拾歩 七衛門	44	居蔵
11	富田「中台」	45	地藏院
12	下山六 []	46	蔵地二成 ^(朱筆)
13	下山四反八 [] 内	47	墓場
14	下山四反式畝歩内 惣衛門	48	竹蔵
15	惣衛門山	49	屋敷五畝拾八歩（この筆の掛かる二区画の東側に次郎八、西側に定七の名あり）
16	富田地	50	屋敷式畝五歩「五左衛門」
17	かハコ山 田地	51	屋敷八畝拾九歩（この筆の掛かる二区画の東側に善衛門、西側に久兵衛の名あり）
18	富田	52	居蔵
19	田成	53	屋敷七畝九歩
20	富田むら	54	屋敷七反拾五歩「義左衛門」
21	永山田地	55	義左衛門蔵
22	川子山「御林」	56	屋敷式畝歩「長兵衛」
23	田面	57	薬師
24	田面	58	居蔵
25	御林	59	屋敷式畝廿三歩「久兵衛」
26	西御立山	60	屋敷式畝拾三歩「源左衛門分」「久兵衛」
27	田畠二成	61	久兵衛「竹蔵」「種井」
28	田畠成	62	市之助「竹山」「種井」
29	田畠二成	63	屋敷「七畝廿四歩」「源左衛門」
30	田二成	64	屋敷「七畝廿四歩」「市之助」
31	田二成	65	屋敷廿七歩「市兵衛」
32	田畠成	66	屋敷八畝九歩 宇衛門
33	田二成	67	居蔵
34	新屋敷七畝式歩「七畝拾歩」「定七」	68	屋敷七反七畝廿六歩（この筆の掛かる三区画に、西側より善之丞・善之丞・惣衛門の名あり）

69	源兵衛 ^(カ) 分「善兵衛」屋敷 ^七 反歩「六畝廿三歩」
70	居敷
71	竹藪
72	弁才天
73	除免「屋敷」 ^七 反畝 ^(マ) 式歩
74	感応院山
75	除免
76	下々「田」
77	惣衛門山
78	田「畠二成」
79	田「畠二成」
80	田面
81	ほう田
82	伊兵衛山
83	中山 ^七 反四畝拾式歩
84	下山 ^七 反四畝拾式歩 三人持
85	中山式反七畝廿六歩
86	五郎左衛門山
87	屋敷 ^七 反 ^四 畝五歩（この筆の掛かる二区画の北側に太兵衛、南側に五兵衛の名あり）
88	屋敷 ^七 反廿五歩「半七」
89	除免「別当」
90	除免
91	寮
92	屋敷 ^七 反九畝拾歩（この筆の掛かる三区画の西側から順に小兵衛、半平、甚衛門分半平の名あり）
93	藪
94	屋敷三畝拾五歩（この筆の掛かる二区画とも伊兵衛の名）
95	屋敷 ^七 反式畝 ^七 歩「彦左衛門」
96	屋敷式畝廿歩（95と同じ区画）
97	屋敷畝 ^(マ) 廿歩（この筆は棒線で抹消、この筆の近くに半平の名あり）
98	屋敷 ^七 反歩「利兵衛（名前は楯円で抹消）」
99	屋敷式畝廿歩
100	屋敷五畝廿歩（99と100の近くに半平の名あり）

101	屋敷三畝歩（この筆、99・100と102の区画に掛かる）
102	屋敷 ^七 反式畝七歩「屋敷 ^七 反 ^七 畝歩「半左衛門分半平」
103	居敷
104	屋敷六畝拾歩「次兵衛」
105	屋敷五畝拾歩「紋衛門」
106	屋敷三畝六歩「茂兵衛」
107	屋敷 ^七 反 ^七 畝廿八歩「宇兵衛」
108	屋敷三反 ^七 畝式歩「三四郎」
109	屋敷 ^七 反式畝七歩「三四郎」
110	屋敷「 ^七 反 ^七 畝拾式歩「庄左衛門」
111	居敷
112	屋敷九畝拾五歩（この筆、二区画に掛かる。北側の区画に八 ^(カ) 兵衛とあり）
113	屋敷 ^七 反三畝廿四歩（この筆二区画に掛かる。東西の区画とも市郎衛門とあり）
114	普門院持
115	屋敷三畝拾八歩
116	櫓木
117	普門院持
118	彦十山
119	庄左衛門 [] (山 ^(カ))
120	[] 郎衛門山
121	彦十山
122	田畠二成
123	田畠二成
124	三木松
125	寮
126	金毘羅「屋敷廿七歩」
127	喜兵衛山
128	ひしや ^(カ) 山
129	金ひら山
130	ひしや ^(カ) 山
131	田二成
132	田砂押畠二成
133	田畠二成
134	田畠二成

茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究——永山村絵図を中心に——

135	屋敷壹畝拾五歩「五兵衛
136	屋敷壹畝貳歩「茂兵衛
137	屋敷壹畝拾八歩「ひしや ^(カ)
138	居敷
139	居敷
140	居敷
141	屋敷三畝歩「屋敷壹反壹畝廿歩「次郎左衛門
142	屋敷壹反四畝廿九歩（この筆の掛かる二区画の東側に庄衛門、西側に磯衛門の名あり）
143	居敷
144	屋敷四畝拾五歩「郷藏
145	屋敷六畝貳歩「与兵次
146	屋敷八畝六歩「利左衛門
147	屋敷貳反〇畝拾八歩「利兵衛
148	屋敷三反九畝拾三歩「平左衛門
149	居敷
150	屋敷七畝歩「平左衛門
151	居敷
152	居敷
153	稲荷
154	屋敷貳畝歩（155と同一区画）
155	屋敷貳畝廿五歩「助兵衛 ^(カ) 分庄兵衛
156	屋敷七畝三歩「庄兵衛
157	下山四畝六歩
158	居敷
159	新兵衛居敷
160	弥衛門居敷
161	長泉院
162	山
163	長泉院山
164	屋敷壹反四畝廿六歩「長泉院「古地
165	屋敷九畝拾歩「長泉院
166	かこ田
167	ほそ田
168	門せん
169	城山

170	城山
171	ねこや
172	長泉院
173	屋敷六畝廿歩「平助
174	屋敷八畝拾五歩「林衛門
175	墓所
176	居敷
177	屋敷六畝廿歩「助衛門分甚右衛門（この筆の区画内には甚右衛門のみの名もあり）
178	屋敷六畝貳歩「常七「茂兵衛（この筆は貼られた付箋による）
179	屋敷壹反廿歩「左平
180	後田
181	畠 ^(朱筆)
182	田 ^(朱筆)
183	田畠二成 ^(朱筆)
184	山 ^(朱筆)
185	わし山「〇山四反「冨田「惣衛門
186	下山五反 []
187	中山壹反七畝貳歩「長泉院
188	屋敷壹反歩「長泉院
189	次郎右衛門「屋敷壹反七畝貳歩
190	屋敷壹反五畝歩「甚平
191	屋敷壹反貳畝歩「林之衛門
192	居敷
193	屋敷六畝廿歩
194	屋敷九畝九歩「清水次郎兵衛 ^(カ)
195	むかふのはし分 ^(カ) 「下山五畝歩「清水次郎 []
196	屋敷七畝廿四歩「長左衛門
197	屋敷四畝廿三歩「屋敷四畝拾六歩「太郎兵衛 ^(カ)
198	居敷
199	屋敷壹反九畝拾歩「六左衛門
200	屋敷壹反八畝拾歩「清左衛門
201	居敷
202	屋敷九畝拾八歩「善右衛門（この筆は貼られた付箋による）
203	居敷

204	屋敷九畝拾八歩「善衛門」
205	屋敷壹反四畝〇歩「屋敷壹反五畝廿八歩 「茂左衛門」
206	屋敷七畝拾四歩（この筆の掛かる二区画 の東側に与平次、西側に勘兵衛の名あり）
207	居藪
208	屋敷六畝拾六歩「三四郎」
209	三四郎山
210	下山四畝歩
211	塚原
212	下山貳反歩
213	中山貳反四畝歩
214	権兵衛持（古塚の文字の西側）「古塚 「助左衛門持（同前東側）」
215	新屋敷「貳畝六歩「権兵衛」
216	屋敷四畝壹歩「次左衛門」
217	屋敷壹畝拾九歩「助左衛門」
218	屋敷壹反拾八歩「助之丞」
219	つかはら「下山壹反五畝歩「次郎衛門」
220	つかはら「下山五畝歩「次郎衛門」
221	屋敷貳畝廿八歩「清兵衛」
222	屋敷七畝八歩「清七 ^(カ) 」
223	屋敷壹反七畝十九歩「茂右衛門分「善衛 門」
224	屋敷壹反壹畝三歩「権兵衛」
225	藪
226	茂衛門山「善衛門持」
227	磯衛門山
228	作衛門山
229	茂左衛門山
230	下山壹反歩
231	万歳作
232	権兵衛山
233	平助山
234	くほの台「下山壹反六畝廿歩」
235	勘衛門山
236	源之丞山
237	屋敷六畝歩「藤左衛門」

238	空地
239	次郎兵 ^(カ) 衛「屋敷九畝歩」
240	半左衛門「屋敷貳反七畝廿歩」
241	屋敷貳畝七歩
242	清水「次郎兵衛」
243	下山貳反歩
244	七衛門
245	薬師堂
246	田嶋二成「利左衛門 ^(朱筆) 」
247	中山 ^(カ)
248	源之丞
249	清水井
250	居藪
251	屋敷七畝拾七歩 ^(棒線で抹消) 「須田「源之丞」
252	源之丞
253	中山
254	墓
255	墓
256	田
257	井戸作
258	屋敷七畝拾歩（この筆の掛かる二区画の 東側に六衛門、西側に七左衛門の名あり）
259	みのこし「下山壹畝拾八歩「孫左衛門」
260	屋敷九畝拾八歩「久兵衛」
261	屋敷壹反廿四歩（この筆の掛かる二区画 の東側に七衛門、西側に喜兵衛分新兵衛 の名あり）
262	アミタ堂
263	屋敷五畝七歩「喜兵衛分「新兵衛」
264	ひかふち「御林」
265	屋敷七畝廿四歩「孫兵衛」
266	居藪アリ ^(ママ)
267	屋敷八畝廿歩「孫左衛門」
268	居くね
269	屋敷貳畝廿歩「孫平」
270	たき不動
271	下山五反八畝廿歩
272	なかの岫「源之丞」

茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究——永山村絵図を中心に——

273	小井戸	290	御林
274	切替田面	291	若林
275	溜池	292	牛ほり
276	溜池	293	空地
277	助之丞山	294	ぬま田
278	若林	295	牛堀
279	草刈場	296	おほ山
280	つかはら「下山八反三畝拾歩	297	たきの下
281	さぶ(カ)山「下山七反三畝八歩	298	田
282	助之丞山	299	田
283	かふ(カ)山「下山七反三畝歩	300	空地
284	かふ(カ)山「下山九畝拾八歩	301	井戸
285	空地	302	御林
286	屋敷四畝廿四歩（この筆の掛かる二区画の南側に吉兵衛、北側に甚八の名あり）	303	田
287	田畠二成	304	かんや「下
288	とり打台「御林	305	田
289	牛堀	306	おほ山

- 注. 1) 「」は改行及び同一区画内だが、書出し位置の異なることをも示す。
 2) 「」は一字と考えられる欠損文字を、[]は一字以上の欠損文字のあることを示す。
 3) (カ)・(ママ)・(朱筆) ほかを付した文字が一字以上に掛かる場合は下線で示した。

地(164)がある。古地とは長泉院が享保18年2月焼失して再建されるまでであった土地であろうが⁹⁾、その周囲にはさらに長泉院と記入された土地・屋敷地もある。その位置は谷を隔てた永山城の西側であり、長泉院は長山氏と関係の深い寺院だったことが推測される。金比羅社については「永留」中に「是ハ他領ヨリ時花来候所安永年中戌八月百姓介五郎持分之地へ勧請、導師長泉院」¹⁰⁾（読点、筆者）云々とあって、金比羅社が安永7年8月百姓介五郎持地へ建立された流行神であったことがわかる。

また、別の調書には「参詣夥敷有之」¹¹⁾とも記されている。

この絵図には以上のごとく寛永以降における村内の変化を反映しているのであるが、以上のほかこの絵図には、小字名やその他地名、御林・御立山、分付山、居藪・藪、地目や地目変わり、郷蔵、池・井戸・種井、空地、墓場等々が記載されている。

小字名やその他地名については本紀要50冊拙稿の小字図ほかを参照されたいが、御林・御立山、分付山、居藪・藪等林野関係についてその所在を見ると、御林・御立山等の藩有林は村内の南(264・288・290)と北(22・25・26・38)に分かれて広がっており、百姓の持山である分付山はその周辺部や東西の台地縁辺部に展開し、南には御林にはさまれて草刈場(279)が設定されている。居藪の類は屋敷地の周辺に見いだせるが、義左衛門の屋敷地(54)と義左衛門藪(55)が隣接しているよう

に、居敷は屋敷地に付属するものであろう。同様のものにいぐねが一カ所（268）認められるが、これは藪より高い樹木からなっていると考えられる。

地目についてはその変更を記す記載について見ると、田畑成りは台地西側の洲上や谷入り口に10ヶ所ほど、東側では谷田上や谷入り口に4ヶ所ほど散見するが、洲上では水路に接するところで砂押のため畑となった田（132）が認められる。田成りは5ヶ所ほどが認められるが、うち4ヶ所は洲上にある。村内南方の溜池（275・276）に北接する耕地には切替田面（274）と記されているが、明治20年代と思われる永山村の耕地図を見ると⁹⁴、そこは畑地となっている。畑地に固定した時期は不明だが、その切替とは田から畑あるいは畑から田への切替を意味するものと思われる。

池・井戸・種井については上記の溜池のほか、村内南方に清水井（249）・井戸（301）・小井戸（273）や名称のない池（231ほか）が点在し、北方谷頭部には単に池とのみ記された池（9）があるが、この絵図にはこの村の台地の根方や洲上にある無数の田井は記されていない。種井（61・62）は村内北方の二名の屋敷地に隣接して存在するのを見ることができる。

郷蔵、空地、墓場について見ると、郷蔵（144）は村内中央部に設置されいるが、寛永検地帳では御蔵屋敷となっている。機能が変わったのであろう。空地（238・258・293・300）は村内南方に点在しているが、荒地ではなく、どのようなことにその原因があるのか不明である。墓場（47・175・254・255）は4ヶ所ある。墓場は家墓であろうが、実際にはもう少し多いようである。墓場のほか村内南西部台地端に古塚（214）があるがその謂れは今のところ不明である。

洲上の旧麻生玉造小川通の脇には榎の木と松（三本松）が描かれている。それらの樹木は村民が親しんだ目印でもあったであろうが、現在はない。

以上、永山村絵図の概要を見てきたが、次に屋敷地について検討を加えよう。

2

以上では、絵図を中心に概要を見たが、ここでは先ず寛永検地帳の屋敷地とその名請人を掲げよう⁹⁵。永山村の寛永検地帳の屋敷地は帳上の567筆目から664筆目に記載されており、小字名も付されていない。従ってそのおよその位置を把握することも困難なのだが、以下、筆番号を付して永山村寛永検地帳の屋敷地とその名請人を掲げ、その屋敷地面積を村絵図のそれと照合すると次頁のごとく比定することが可能である。

絵図に見出せない屋敷地が8筆あるが、寛永検地帳上の屋敷地98筆中90筆が上記のごとく絵図上の屋敷地に比定できる。そして寛永検地帳上の屋敷地の所在を追っていくと、屋敷地は村内の小地域的なまとまりごとに秩序立って記載されていることがわかるが、このことは比定に大きな誤りのないことを示唆しよう。最初の2筆の屋敷地の所在は不明だが、屋敷地は村内南西隅、小字で言えば二ツ家・堀川方面から記載が始まっているようで、そこには筆番号569の屋敷地1筆しか確認できないが、以下村内に小地域的なまとまりをもった屋敷地を見ると、筆番号570～581、582～585、586～588、589～597、598～603、604～609、610～614、616～624、625～640、641～646、648～652、653～658、659

茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究——永山村絵図を中心に——

筆番号		畝	歩	名請人名	絵図中の番号		屋敷	12	1		
567	屋敷	14	5	清右衛門	?	616	屋敷	3	15	半右衛門	95
568	屋敷	8	0	市之丞	?	617	屋敷	2	20	半右衛門	94
569	屋敷	4	24	市之丞	286	618	屋敷	1	0	半右衛門分久作	96
570	屋敷	4	1	源二郎	216	619	屋敷	11	0	半右衛門分彦市	98
571	屋敷	1	19	孫兵衛	217	620	屋敷	23	0	半右衛門	102
572	屋敷	6	16	六兵衛	208	621	屋敷	5	20	半右衛門	?
573	屋敷	17	19	勘右衛門	223	622	屋敷	2	21	半右衛門分半四郎	100
574	屋敷	11	3	与作	224	623	屋敷	19	10	半右衛門分彦九郎	99
575	屋敷	14	20	弥七郎	205	624	屋敷	6	23	半右衛門分小右衛門	92
576	屋敷	15	28	兵助	205	625	屋敷	1	25	彦四郎	69
577	屋敷	5	10	次郎兵衛	?	626	屋敷	15	2	勘四郎	88(力)
578	屋敷	7	14	市之丞	206	627	屋敷	8	9	観音院事別當	?
579	屋敷	2	28	龍藏院	221	628	屋敷	2	0	喜右衛門	66
580	屋敷	10	18	与右衛門	218	629	屋敷	10	0	長七	56
581	屋敷	7	8	内匠	222	630	屋敷	11	26	三五郎	69
582	屋敷	9	18	善右衛門	204	631	屋敷	1	24	市之介	68
583	屋敷	18	10	清六	200	632	屋敷	0	21	源三郎	65
584	屋敷	3	0	二郎兵衛	141	633	屋敷	8	19	介五郎	65
585	屋敷	11	21	助左右衛門	141	634	屋敷	1	10	茂作	51
586	屋敷	1	18	六左右衛門	137	635	屋敷	2	23	長次郎	?
587	屋敷	1	2	七兵衛	136	636	屋敷	10	15	久五郎	59
588	屋敷	1	15	別當	135	637	屋敷	5	18	助五郎	60
589	屋敷	6	20	久七	193	638	屋敷	2	5	与兵衛	54
590	屋敷	19	10	兵藏	199	639	屋敷	12	7	正五郎	49
591	屋敷	15	0	甚平	190	640	屋敷	5	11	久二郎	50
592	屋敷	12	0	甚平	191	641	屋敷	6	11	半右衛門分彦次郎	109
593	屋敷	9	9	甚平	194	642	屋敷	11	28	源藏	105
594	屋敷	4	23	清三郎	197	643	屋敷	31	2	清右衛門	104
595	屋敷	4	16	久次	197	644	屋敷	3	6	清右衛門	107
596	屋敷	7	24	源之丞分外記	196	645	屋敷	3	5	清右衛門	108
597	屋敷	17	2	与七郎	189	646	屋敷	6	20	源之水	106
598	屋敷	9	0	甚四郎	239	647	屋敷	6	2	彦作	?
599	屋敷	27	20	彦左右衛門	240	648	屋敷	10	21	助右衛門	177
600	屋敷	2	7	彦左右衛門	241	649	屋敷	7	0	七兵衛	178
601	屋敷	6	0	源七郎	237	650	屋敷	39	13	七兵衛	179
602	屋敷	7	17	源藏	251	651	屋敷	2	0	七兵衛	150
603	屋敷	7	10	弥吉	256	652	屋敷	2	25	七兵衛	148
604	屋敷	10	24	新十郎	261	653	屋敷	7	3	弥藏	154
605	屋敷	5	7	新左衛門	263	654	屋敷	8	15	新七	155
606	屋敷	9	18	市藏	260	655	屋敷	9	10	藤右衛門	156
607	屋敷	2	20	龍藏院	269	656	屋敷	14	26	庄作	174
608	屋敷	8	20	七郎右衛門	267	657	屋敷	11	12	長泉院	165
609	屋敷	7	24	正三郎	265	658	屋敷	13	24	長泉院	164
610	屋敷	4	15	御藏屋敷	144	659	屋敷	9	15	久八	110
611	屋敷	29	18	庄九郎	147	660	屋敷	9	20	惣右衛門	113
612	屋敷	8	6	甚平	146	661	屋敷	0	27	惣兵衛	112
613	屋敷	6	22	甚平	145	662	屋敷	3	18	長藏	?
614	屋敷	14	29	源介	142	663	屋敷			行人 林海	126
615	屋敷	15	5	清四郎	87	664	屋敷			地藏院	115

～664, のごとくなる。615のようにどこに入れたらよいか, 567～569を1グループと見てよいか等判断できないものもあるが, 567～569を1グループとすれば永山村の寛永検地帳上の屋敷地名請人は14の地域的まとまりをもったグループからなっていることが理解される。もう少し大きくまとめることも可能だが, ここでは上記のように捉えておこう。

寛永検地帳上の屋敷地の名請けを見ると, 一人で3筆以上の屋敷地を名請けする者が見られる。半右衛門・甚平・清右衛門・七兵衛・市之丞の5名で, 彼らは村内における上層の大規模耕地所持者であるが, 彼らの屋敷地の名請けを見ると, 村内最大の耕地所持者半右衛門は4筆の屋敷地とほかに分付主として6筆の屋敷地を名請けし, 2番目の耕地所持者甚平は5筆, 3番目の耕地所持者清右衛門は4筆, 4番目の耕地所持者七兵衛は5筆, 16番目の耕地所持者市之丞は3筆をそれぞれ名請けしている。市之丞については明らかではないが, そのほかの名請人の屋敷地のあり方を見ると, いずれも先の屋敷地グループの一つで多くの屋敷地を占居し, 他のグループには1, 2筆の屋敷地を有している。半右衛門について見ると, 616～624のグループ9筆中に分付主としての名請けを含め8筆までをも占居し, 他の1筆を641～646のグループに有し, 甚平は589～597のグループ9筆中の3筆を, 610～614のグループ5筆中の2筆を, 七兵衛は648～652のグループ5筆中の4筆を, 586～588のグループ3筆中1筆をそれぞれ有することくである。

最も大きい屋敷地は甚平・七兵衛など屋敷地筆数の集中する地域にある。半右衛門の最大屋敷地2反3畝の所在位置は不明だが, 半右衛門の場合も屋敷地筆数の集中する616～624のグループ内に最も大きな屋敷地はあったのではないかと考えられる。屋敷地の集中する場所とそうでない場所との距離はまちまちで, 甚平の場合はグループに占める屋敷地の割合は低い, 甚平が屋敷地を有するグループは隣接している。

分付関係に隷属的關係を認めるとすれば, 永山村には自立度の高い隷属農民家風が存在するから, 分付となった名請人はそのように考えられるが, 以上のような地域的まとまりをもった屋敷地のグループの性格としては, 擬制的關係をも含めた同族团的性格がその核にあり, その展開として離れたところにも屋敷地があるのではなからうか。

勘弥から牛堀村に本拠を移し, 両村の庄屋をつとめた源之丞の屋敷地の名請けを勘弥及びその付近に見ると, 絵図にはその所持者名が須田源之丞とあるが, その寛永検地帳上の名請けは源藏となっている。源藏は屋敷地を2筆名請けしているが, 一方は641～646のグループ内西端にあって, その屋敷地の南側屋敷地の名請人が源之丞となっているのである。須田家の系譜には源藏の名はない。同家の系譜の一つには「為綱ヨリ為成(源之丞。寛永検地名請人源之丞為清より二代前の当主)之間系譜残欠不分明, 上杉家二属トモ伝, 佐竹氏二属ルトモ云, 初永山ニ居住, 今故跡アリ俗上家ト唱, 門跡ヲ字ニ元門ト唱, 山柵ノ下ヲ垣下ト唱, 元亀天正ノ頃牛堀墾開ノ後移住ト口碑ニ伝候」(読点, 括弧内筆者)と記されているが, 同家の先祖は当初絵図の105・106の場所に居を構え, 村内東側の谷田開発にともない, 清水井もあり飲料水を確保できる勘弥に屋敷を構えるようになったのではなからうか。源之丞は外記の分付主としても1筆の屋敷地を名請けしているが, その屋敷地は勘弥より南西にやや離れた絵図の196に位置している。

茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究——永山村絵図を中心に——

半右衛門の合計10筆の屋敷地の所在位置を現在の宅地図に比定すると、616（絵図中の95）以下617（同前94）618（同前96）624（同前92）の計4筆の屋敷地の位置する場所—小字で云えば元内に当たる—には屋敷地はない。このことは天保以降にということであろうか、永山村では消滅した寛永検地帳上の屋敷地があったことや、現国道355号沿いを初めとする屋敷地の移動があったことを示唆しよう。村絵図と小字図や現在の宅地図との照合を完全には行い切れていないが、半右衛門以外でもその屋敷地の位置するところに現在は屋敷がない例が散見するようである。この絵図が作成された時期以降の屋敷地の動態については天保検地帳の検討がさらに必要となろう。

おわりに

永山村に関しては以上のごとく寛永検地帳上の屋敷地の所在位置を確認することができ、その集落のあり方を把握することができた。「(永山村絵図)」が作成される時期に至るまで屋敷地は全く移動することはなかったのかという疑問ものこるが、現在のところその疑問について検討しうる史料を見出しはしていない。「(永山村絵図)」に示された寛永検地帳の屋敷地の所在位置を寛永検地時のそれと捉えつつ、村支配や村内の農民構成・村民の社会的結合のあり方とその歴史的変化について検討を加えなければならないが、ここでは永山村の寛永検地帳の大方の屋敷地の所在が判明できたことを確認することにとどめ、それらについては今後の課題としたい。

注

- (1) 須田本家文書目録については、本紀要第35冊の拙稿を参照されたい。
- (2) 文部省史料館『史料館所蔵史料目録』第19集「須田家文書解題」。
- (3) 木村東一郎『村図の歴史地理学』によると、肥前国では200×299 cm と300×399 cm の大きさが村絵図の56 %を占めているが、管見の限り関東では195×277 cm の絵図は大きい部類に入るのはないと思われる。
- (4) 「潮来御領村々庄屋姓名録」（須田本家文書）。
- (5) このトレースは絵図を54分割して写真に撮り、B6 サイズにプリントアウトし、接合したものをトレースするという方法を使った。
- (6) 以上、『新編常陸国誌』（常陸書房）を参照。
- (7) 『水戸市史』中巻(一)を参照。
- (8) 「寛文三年ヨリ永留」（須田本家文書）。
- (9) 享保年18年2月「乍恐以書付御願申上候事」（「寛文三年ヨリ永留」収載）。
- (10) 注(8)に同じ。
- (11) 「(南領村々寺社調書)」（須田本家文書「須田氏秘録之三」収載）。
- (12) 旧牛堀町役場所蔵。
- (13) 永山村の寛永検地帳については本紀要第50冊の拙稿を参照されたい。

（かどまえ・ひろゆき 文学部教授）